

529

69



始



529

69

山田
正徳
三年
九月



風は草木にまろむた

山崎蒼鳥詩集

イデア書院

13. 8. 21
内交



529-69

なんちの面に汗して生くべし

人間の勝利

人間はみな苦んでゐる
何がそんなに君達をくるしめるのか
しつかりしろ
人間の強さにあれ
人間の強さに生きろ
くるしいか
くるしめ
それがわれわれを立派にする

みろ山頂の松の古木を
その梢が烈風を切つてゐるところを
その音の痛痛しさ
その音が人間を力づける
人間の肉に喰ひいるその音のいみじさ
何が君達をくるしめるのか
自分も斯うしてくるしんでゐるのだ
くるしみを喜べ
人間の強さに立て
耻辱を知れ
そして倒れる時がきたらば
はほゑんでたほれる

人間の強さをみせて倒れる

一切をありのままにじつと凝視めて

大木たいぼくのやうに倒れる

これでもか

これでもかと

重いくるしみ

重いのが何であるか

息絶えるとも否と言へ

頑固であれ

それでこそ人間だ

巻首に――

此の詩集を街頭におくりだしてから春秋はいくたびか
回つた。はやいものだ。それと一しよに世にでた千草が
もう來春は小學校にあがるのである。その子どもが
れたのと前後して病床にぶつたほされた自分は、まだ
かうして罅の深くはいつたままの體である。

そうしたときのものだけに此の詩集は、自分にとって、他
のどの詩集よりもことさらになつかしまれる。

それからの自分達の日々がどんなものであつたか。と
ても、ありのままには書き綴ることができない。此處まで

生きのびてきたことは、とにかく奇蹟にもひとしい事實。

6

まことに此の自然の中でくるしみくるしむものにのみ自然はおのが美と愛とを、人生無上の滋味としてあちははせるのか。

いま鮮装改版し、ひさしく絶本になつてゐた此の詩集をふたたびあたらしく梓刊するにあたつて、そのことが泌々と思ひあはされる。

だがまた讀みかへしてみると、これらの詩章は、いまの自分とはたいへん遠く隔つてゐる。それはまるで旅人が自分のたどりたどつてきたその空の彼方をはるかにふりあほいで望むようなもの——その頃の詩境はといへば、まだ

まだ、いかに眞摯であつたとは言へ、まだ自然乃至人生の讚美、讚美にのみ始終してゐたその自然とともどもに汗を流しなみだをながしてはゐなかつた。

いかにも人生の苦しみの中にはゐた。けれど、その自然と一しよに生きてはゐなかつた。

自分は此の詩集を手にするであらうひとびとに言ふ。それはほかでもない。

——かくも自分の讚歎せずにはゐられなかつたその自然と生活との眞只中に燦然と生きてほしいといふ一事である。

さて、最後にかうして此の詩集がまたもや日の光にふれ 7

るようになったのはひとへに小原學兄の懇切なお勧めに
よる。 8

このことを自分は著者の心からの感謝としてここに銘
記しておく。

茨城縣イソハマにて

山村暮鳥

目次

序詩
巻首に

I

穀物の種子……………	1
彼等は善い友達である……………	2
父上のおん手の詩……………	4
曲つた木……………	7
ランプ……………	9

夜の詩	11
邊にこの大都會を感じる	13
何處へ行くのか	14
梢には小鳥の巢がある	16
春	17

II

萬物節	9
種子はさえづる	21
ある雨後のあしたの詩	22
十字街の詩	24

ホプラの詩	27
風の方向がかわつた	29
翼	31
針	32
としよつた農夫は斯う言つた	34
善い日の詩	38
朝々のスロープ	39

III

其處に何がある	43
憂鬱な大起重機の詩	44

耳を持つ者に聞かせる詩……………48
 人間に與へる詩……………49
 わすれられてゐるものについて……………51
 寝てゐる人間について……………53
 〇 子どもは泣く……………55
 或る時……………58

IV

人間の午後……………59
 雨の詩……………60
 荷車の詩……………63

歡樂の詩……………63
 海の詩……………64
 ザボンの詩……………66
 此處で人間は大きくなるのだ……………67
 郊外にて……………69
 波だてる麥畑の詩……………71
 刈りとられる麥の詩……………74
 都會にての詩……………76
 大 鏡……………78
 一本のゴールデン・バット……………79
 收穫の時……………81

V

キリストに與へる詩 83
 或る淫賣婦におくる詩 85
 溺死者の妻におくる詩 91
 大きな腕の詩 96
 先驅者の詩 98
 故郷に歸つた時 109

VI

秋ぐち 101
 此の世界のはじめもこんなであつたか 103
 ひとりごと 104
 新聞紙の詩 106
 汽車の詩 109
 ♪ 都會の詩 111
 都會の詩 112
 握手 115
 太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ 117

VII

自分はさみしく考えてゐる	119
蝗	120
愛の力	122
人間の神	124
秋のよるこびの詩	126
草の葉つげの詩	128
或る風景	129
雪ふり蟲	132
冬近く	133
蟋蟀	134
或る日の詩	135
或る日の詩	136

記憶の樹木	137
山	139
道	140
初冬の詩	141
路上所見	142
友におくる	143
悪い風	144
雪の詩	145

VIII

世界の黎明をみる者におくる	147
---------------	-----

自分は此の黎明を感じてゐる 149
 偉大なもの 150
 強者の詩 151
 病める者へ贈物としての詩 154
 或る日曜日 156
 朝の詩 158
 大風の詩 160
 農夫の詩 161
 人間の詩 163
 姪婦を頌する詩 172
 妹におくる 175
 十字架 176

輸の詩 178
 鴉祭の詩 180
 單純な朝餉 182

IX

その梢のてつべんに一はの鷗がないてゐる 185
 雨は一粒一粒ものがたる 187
 麥 畑 188
 朝 190
 人間苦 192
 わたしたちの小さな畑のこと 195

一日のはじめに於て	198
自分達の仕事	200
消 息	202
感 謝	203
労働者の詩	205
老漁夫の詩	207
驟雨の詩	211
苦惱者	212
朝あけ	223

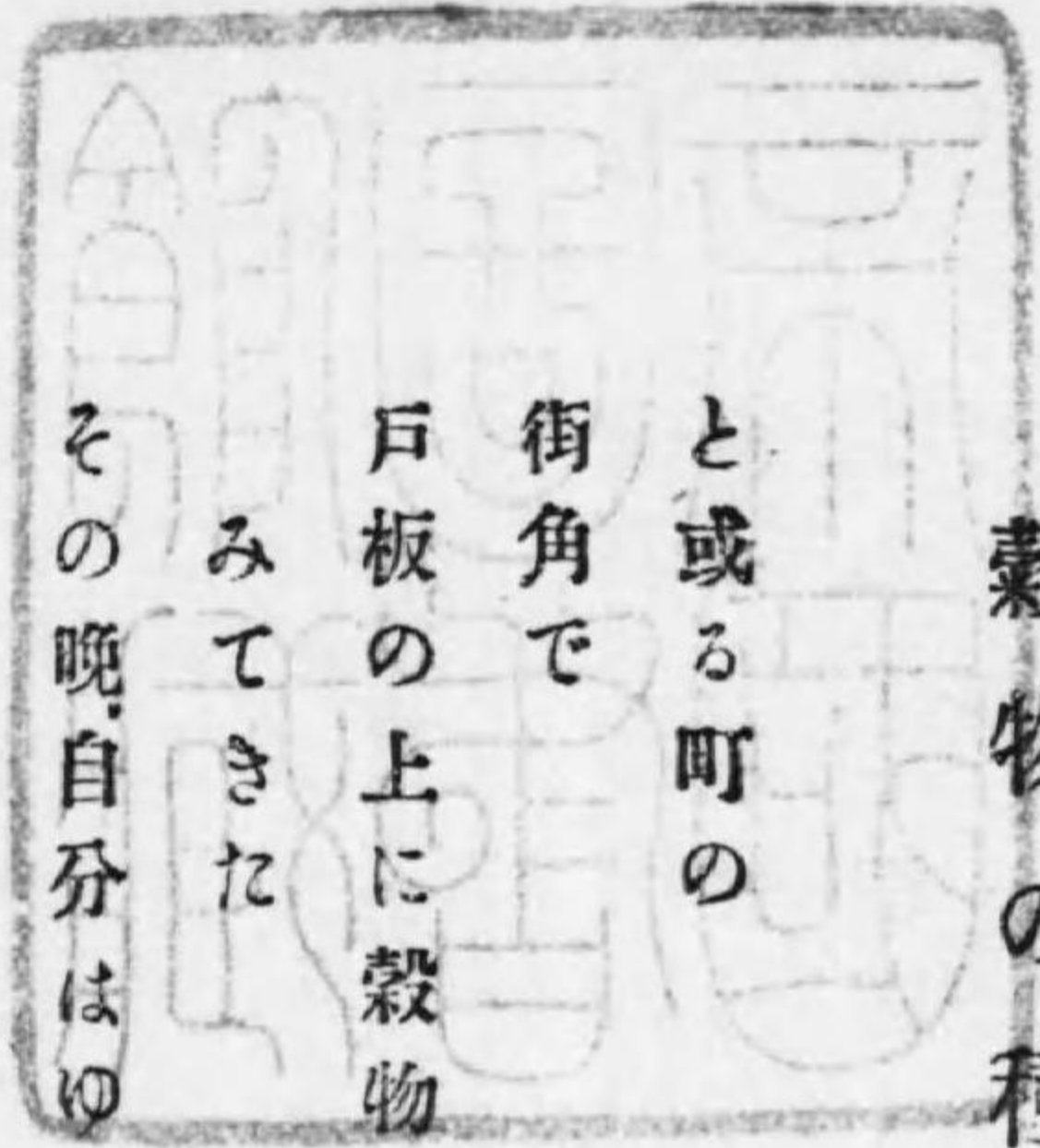
X

生みのくるしみの頌祭	225
あかんぼ	227
風 景	229
疾風の詩	230
友におくる詩	232
自分はいまこそ言はう	233
歩 行	235
家 族	237
薄暮の祈り	239
後より來る者におくる	1



I

穀物の種子



と或る町の

街角で

戸板の上に穀物の種子をならべて賣つてゐる老^は嫗^あさんを

みてきた

その晩自分^はゆめをみた

細い雨がしつとりふりだし

種子は一齊に青々と

芽をふき

ばあさんは燈の面をして
その路端に死んでゐた

彼等は善い友達である

結氷したやうな冬の空

その下で渦捲く烈風

山山は雪でまつ白である

晝でもほの暗い

ひろびろとした北國の寒田に

馬と人と小さく動いてゐる

はるかに遠く此處では

馬と人と

なんとといふ陸じさだ

そして相互に助けあつて生きてゐる

寒田は犁きかへされる

犁きかへされた刈株の田の面はあたらしく黒黒と

その上に鴉が四羽五羽

どこからきたのか

此のむごたらしい景色の中にまひおりて

鴉等は鳴きもせず

けふばかりは善い友達となつて働いてゐる

なにを求めて馬や人といつしよになつてゐるのか
それが此處からはつきり見える
田の畦の枯れたやうな木木までが苦痛を共にしてゐるや
うだ

父上のおん手の詩

そうだ
父の手は手といふよりも寧ろ大きな馬鋤だ
合掌することもなければ

無論他人^{ひと}のものを盗^{かす}掠^すめることも知らない手
生れたままの百姓の手
まるで地べたの中からでも掘り出した木の根つこのやう
な手だ
人間のこれがまことの手であるか
ひとは自分の父を馬鹿だといふ
ひとは自分の父を聖人だといふ
なんでもいい
唯その父の手をおもふと自分の胸は一ぱいになる
その手をみると自分はなみだで洗ひたくなる
然しその手は自分を力強くする
この手が母を抱^{だきし}擁^しめたのだ

そこから自分はでてきたのだ

此處からは遠い遠い山の麓のふるさとに

いまもその手は骨と皮ばかりになつて

猶もこの寒天の瘦せた畑地を耕作してゐる

ああ自分は何にも言はない

自分はその土だらけの手をとつて押し戴き

此處ではるかにその手に熱い接吻をしてゐる

曲つた木

うすぐらい險惡な雲がみえると

すぐ野の木木はみがまへする

曲りくねつた此の木木

ねぢれくるはせたのは風のしわざだ

そしてふたたびすんなりとは

どうしてもなれない

そのかなしさが

いまはこの木の性となつたのか

風のはげしい此處の曲りくねつた頑固な木木
 骨のやうにつつぱつた梢にも雨が降り
 それでも芽をつけ
 小鳥をさえずらせる
 まがりなりにも立派であれ
 あゝ野にあつて裸の立木
 ああ而もなほ天をさす木木

ラ
ン
プ

野中にさみしい一けん家
 あたりはもう薄暗く
 つめたく
 はるかに遠く
 ぼつちりとランプをつけた
 ぼつちりと點じたランプ
 ああ
 何といふ眞實なことだ

これだ

これだ

これは人間をまじめにする

わたしは一本の枯木のやうだ

一本の枯木のやうにこの烈風の中につつ立つて

ランプにむかへば自ら^{おのづか}合さる手と手

其處にも人間がすんでゐるのだ

ああ何もかもくるしみからくる

ともすれば此の風で

ランプはきえさうになる

そうすると

私もランプと消えさうになる

夜の詩

こうして力を一つにしながら

ランプも私もおたがひに獨りぼつちだ

あかんばを寝かしつける子守唄

やはらかく細くかなしく

それを歌つてゐる自分も

ほんとに何時^{いつ}かあかんばとなり

ランプも

火鉢も

急須も茶碗も

ぼんぼん時計も睡くなる

遙にこの大都會を感じる

この麥畑の畦のほそみち

この細道に立つ自分をはるかに大都會も感ずるか
けふもけふとて

砂つぼこりの中で揺れてゐる草の葉つば

ああ大旋風も斯る草の葉つばからはじまつてやつぱり此
の道をはしるのだ

ああ此の道

道はすべて大都會に通ずる

道は蔓のやうなものでそして脈搏つてゐる

まつびるまの太陽も暗く

あたまから朦朧と塵埃をあびせかけられてゐる幻想

その塵埃の底にあつて呼吸いきづく世界きつての大都會よ

ああ大沙漠の壯麗にあれ

ああ壯麗な大旋風

街街の大建築の屋根から屋根をわたつて行く

大群集の吠えるやうな聲

その大都會をしみじみと
その大沙漠の山につつ立つ林のやうな大煙筒を
此のしづけさにあつて感ずる

何處へ行くのか

またしても
とうと鳴る風
窓の障子にふきつけるは雪か
さらさらとそれがこぼれる

まつくらな夜である
ひとしきりひつそりと
風ではない
風ではない
それは餓えた人間の聲聲だ
どこから来て何處へ行く群集の聲であらう
誰もしるまい
わたしもしらない
わたしはそれをしらないけれど
わたしもそれに交つてゐた

梢には小鳥の巢がある

なにを言ふのだ
どんな風にも落ちないで
梢には小鳥の巢がある
それでいい
いいではないか

春

どこかで紙鳶たごのうなりがする
子どもらの耳は敏く
青空はひさしふりでおもひだされた
いままで凍かてついてゐたやうな頑固な手もほんのりと赤
味をさし
どことなく何とはなしにぎやかだ
どこかで紙鳶のうなりがする
それときいてひとびとは



II

ああ春がきたなと思ふ
そして何か見つけるやうな目付で
水水しい青空をみあげる
てんでに紙鳶を田圃にもちだす子ども等
やがてあちらでもこちらでもあがるその紙鳶
それと一しよに段段と
子どもらの足も地べたを離れるんだ

萬物節

雨あがり

しつとりとしめり

むくむくと肥え太り

もりあがり

百姓の手からこぼれる種子たねをまつ大地

十分によく寝てめざめたやうな大地

からりと晴れた蒼空

雲雀でも啼きさうな日だ

いい季節になつた

穀倉のすみつこでは

穀物のふくろの種子もさへづるだらう

とびだせ

とびだせ

蟲けらも人間も

みんな此の光の中へ！

みんな太陽の下にあつまれ

種子はさえづる

種子^かはさえづる

穀倉の種子のふくろで

はるがきたとてか

青空の雲雀も

それをききつけた百姓は

あわてて穀倉に駆けこみ

穀物の種子のふくろを抱きだした

22

ある雨後のあしたの詩

よひとよ細い雨がふり
しのめにからりとはれて
しつとりと
なにかも重みがついた
ああ此の重み
そのおちつきが世界をうつくしくするのであるか

それだのに人間ばかり
何といふみすばらしさだ
穀物の種子のふくろをだきだすその腕うでにつたはる
あの重みだ
あの重みにみらみてよ
ああ人間
大地と太陽とのいとし子

23

十字街の詩

"THIS IS THE MANY-TENTACLED TOWN"

— VERHAEREN —

ここは都會の大十字街
すべての道路はここにあつまり
すべての道路はここからはじまる
堂堂とその一角にそびえた
大銀行をみる
その窓したをぞろぞろと

ひとはゆき

ひとはかへる

なんにもしらないあなかびとすら

此の大銀行の正面にてはあたまを垂れ

手をうやうやしくあはせる

ああ都會の心臓である十字街

都會はまるで悪食あくじきをする大魚の胃ぶくろのやうに

ここはひとびとをひきつけて

そのひとびとを喰ひ殺すところだ

そこから四方へ草の蔓のやうにのびてゆく街街

つらなり列ぶ家家

何といふ立派なものだ

ああ此のけむり吐く大煙筒の林
此のすばらしさに帽子をとれ
へとへとにつかれながら而も壯麗に生きてゐる大都市
此の中央大十字街
その感覺はくもの巢のやうな大路小路にひろがり
ひろいひろい郊外に露出して顛え
其處で何でもかでも鋭敏に感じてゐる神経
どんなものでもひつ掴まうとしてゐる神経
その尖端のおそろしさよ

ポプラの詩

すんなりと正しくのび
うすいみどりの葉をつけた
高臺のポプラの木
その附近あたりから
みえる遠方はなつかしい
一本すんなり立つてゐても
五本六本列んでゐても
此の木ばかりはすすきりしてゐる

そよ風にこれがひらひらするのをみてゐると
わたしはたまらなくなる
ああ此の木のやうな心持
怖い敏感なポプラ
冬のをはりにもう芽ぶき
秋には入るとすぐ落葉する
ああポプラ
これこそ光線の愛する木だ
子ともらは此の木のしたで遊ばせる

風の方角がかわつた

どこからともなく
とんできた一はのつばめ
燕は街の十字路を
直角にひらりと曲つた
するといままでふいてゐた
北風はびつたりやんで
そしてこんどはそよそよと
どこかでゆれてゐる海草の匂ひがかすかに一めん

街街家家をひたした

ああ風の方向がすつかりかわつた

併しそれは風の方向ばかりではない

妻よ

ながい冬ちうあれてゐた

おまへのその手がやはらかに

しつとりと

薄色をさしてくるさへ

わたしにはどんなによろこばしいことか

それをおもつてすら

わたしはどんなに子どもになるか

翼

よろこびは翼のよくなものだ

よろこびは人間をたかく空中へたづさえる

海のやうな都會の天^{そら}

そこで悠悠と大きなカーヴを描いてゐる一羽の鳶

なんといふやすらかさだ

それをみあげてゐるひとびと

彼等の肩には光る翼がひらひらしてゐる

うたがつてはならない

彼等はなんにも知らないのだが
見えない翼はその踵にもひらひらしてゐる

針

子どもの寝てゐるかたはらで
その母はせつせと着物を縫つてゐる
一つの手が拍子をとつてゐるので
他の手はまるで尺取蟲のやうにもくもくと
指さきの針をすすめてゆく

目は目でまばたきもしないで凝こもとそれを見てゐる
音すら一つかたともせず
夜はふけてゆく
なんといふしづかなことだ
子どもの寢息もすやすやと
針は自然にすすんで行く
むしろ針は一すぢの糸を引いて走つてゐるやうだ

ごしよつた農夫は斯う言つた

あの頃からみればなにもかもがらりとかわつた
だがいつみてもいいのは

此のひろびろとした大空だけだぞい
わすれもしねえ

この大空にまん圓い月がでると

穀倉のうしろの暗い物蔭で

俺等はたのしい逢引をしたもんだ

そこで汝あみごもつたんだ

何をかくすべえ

穀倉がどんな事でも知つてらあ

そうして草も焼けるやうな炎天の麥畑で

われあ生み落とされたんだ

それもこれもみんな天道様がご承知の上のこつた

おいらはいつもかうして貧乏だが

われあ秣草をうんと喰らつた犢牛のやうに肥え太つてけ

つかる

犢牛のやうに強くなるこつた

うちの媪もまだほんの尻つちよだつた

その抱き馴れねえ膝の上で

われあよく寝くさつた

それをみるのが俺等はどんなにうれしかつたか
そして目がさめせえすれば

山犬のやうに吼えたてたもんだ

其處にはわれが目のさめるのを色色な玩具がまつてた
なんだとわれもおもふ

そのその大きな鉄だ

それから納屋にあるあの犁と

壁に懸つてあるあの大鎌だ

さあこれからは汝の番だ

おいらが先祖代代のこの荒れた畑地を

われあそのいろんなおもちやで

立派に耕作つてくらさねばなんねえ

われあ太え男になつた

そこの尻つ子がふりけえつてみるほどいい若衆になつ

た

おいらはそれを思ふとうれしくてなんねえ

しつかりやつてくれよ

もうおいらの役はすつかりすんだやうなもんだが

おいらはおいらの蒔きつけた種子がどんなに芽ぶくか

それが唯一つの氣がかりだ

それをみてからだ

それをみねえうちは誰がなんと言はうと

決して此の目をつぶるもんでねえだ

善い日の詩

どこをみても木木の芽は赤らみ
すつかり赤らみ

枯葉の下から草も青青と

そしてしつとり濡れた木の下枝では

どこからともなく集つてきた鶉やのじこが囀つてゐる
何といふ善い日であらう

友達の花嫁のまめまめしい働きぶりをみてきた私の目の
かわゆらしさよ

何がそんなにうれしいのか
お太陽様もみてゐらつしやる通り
此の山みちで
私はすこし酔つてをります

朝朝のスープ

其頃の自分はよほど衰弱してゐた
なにをするのも物倦く
なにをしてもたのしくなく

冢の内の日日に重苦しい空気は子どもの顔色をまで憂鬱
にしてきた

何時もの貧しい食卓に

或る朝珍しいスープがでた

それをはこぶ妻の手もとは震えてゐたが

その朝を自分はわすれない

その日は朝から空もからりと晴れ

匙まで銀色にあたらしく

その匙ですくはれる小さい脂肪の粒粒は生きてきらきら

光つてゐた

それを啜るのである

それを啜らうと瀬戸皿に手をかけて

瘦れてゐる妻をみあげた

其處に妻は自分を見まもつてゐた

目と目が何か語つた

そして傍にさみしさうに座つてゐる子どもの上に

言ひあはせたやうな視線を落した

其の時である

自分は曾て自分の経験したことの無い

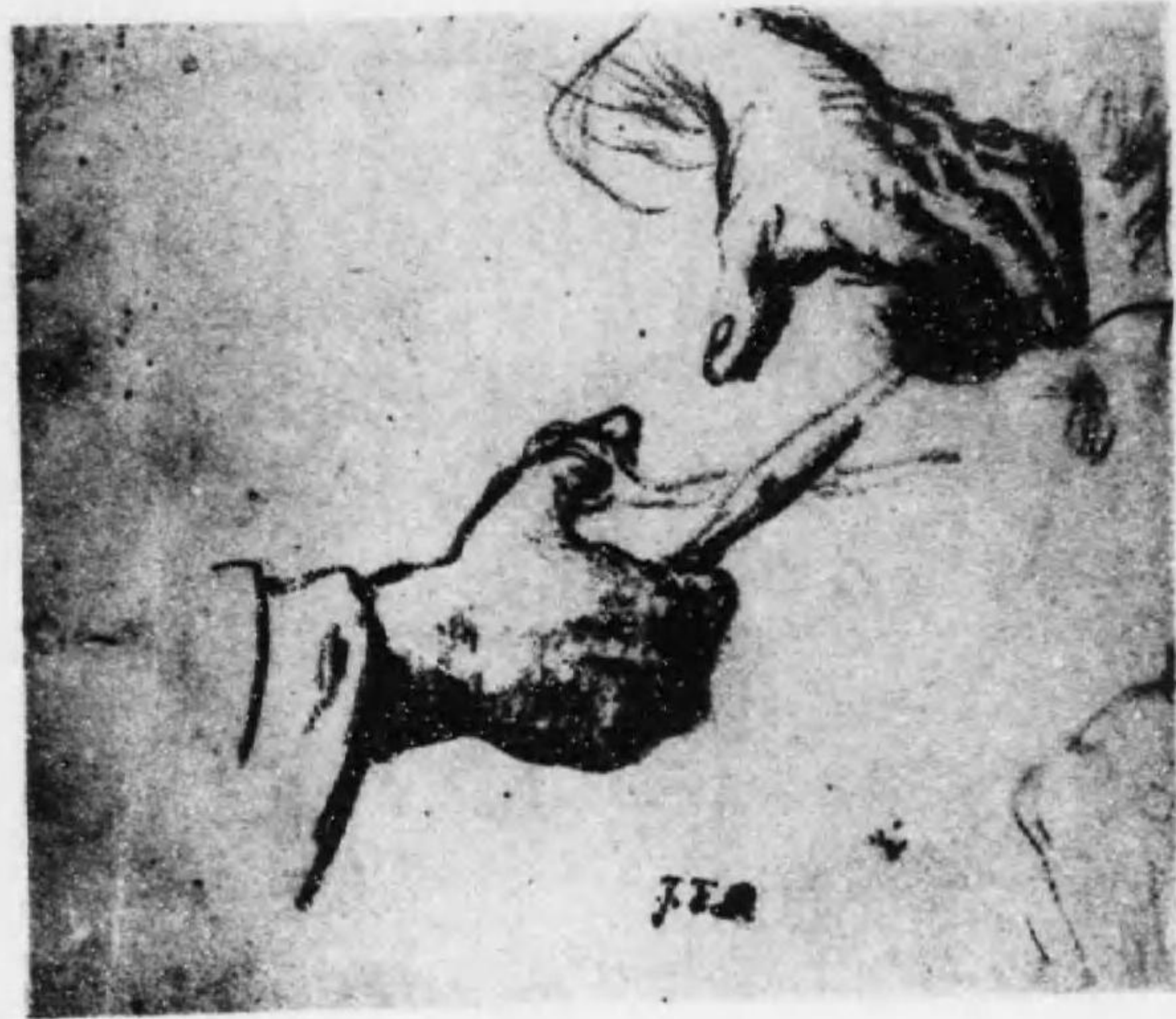
大きな強いなにかの此身に泌みわたるのを感じた

終日地上の萬物を温めてゐた太陽が山のかなたにはいつ

て

空が夕焼で赤くなると

妻はまた祈願でもこめに行くやうなうしろすがたをして 41



III

街にでかけた
食卓にはさうして朝毎にスープが上つた
自分は日に日に伸びるともなく伸びるやうな草木の健康
を
妻と子どもと朝朝のスープの愛によつて取り返した
長い冬の日もすぎさつて
家の内はふたたび青青とした野のやうに明るく
子どもは雲雀のやうに囀りはじめた

其處に何がある

足もとの地面をみつめてかんがえてばかりゐる人間の腰

ははやく彎曲^{まが}る

いたづらに嘆き悲しんではならない

兄弟よ

あたまの上には何があるか

樹木のやうに眞直^{まっすぐ}立て

そして垂れた頭をふりあげて高く見上げろ

其處に何がある

この大きな青空はどうだ
人間はこの青空をわすれてゐるのだ
兄弟よ
この大きな青空はどうだ

憂鬱な大起重機の詩

ぐつと空中に突きだした
腕だと思へ
いま大起重機は動いた

重い大きなまつ黒いものをひつ掴んで
それを輕輕と地面から空中へひき上げた
微風すらない
此の静謐をなんと言はうか
怖しいやうな日和だ
蟻のやうに小さく
大きな重いものの取去られたところに群がつて
うようよ蠢動いてゐる人人
大起重機のたしかな力をみる
その大浪のやうな運動を
その大きな沈黙を
ああ大起重機の憂鬱！

ああ大起重機の怪物！

此の不可思議な怪力に信頼しろ

その動いて行く方向をみつめて大空を仰いでゐる人人

それを据附けたのは何ものだ

それをこしらへたのはどの手だ

それを考へれば

ああこれは人間以上の人間業だとすぐ解ることだ！

人間は自然を征服した！

今こそ人間は一切の上に立つべきだ

太陽も眩暈めくか

ああ人間は自然を征服したか

ああ

けれど人間は悲しい

此の大起重機にその怪力を認めた瞬間から

まつたく憐れな奴隷となつた

そして蟻のやうに小さくなつた

それがどうした

それがどうした

かんかん日の照る地球の一てんに跪坐ひざまずいて此の大怪物を

禮拜しろ

ああ此の憂鬱な大起重機の壯麗！

ああ此の憂鬱な大起重機の無言！

耳をもつ者に聞かせる詩

これが神の意志だ

この力の觸れるところ

すべては碎け

すべて微塵となる

高高とどんな物でもさしあげ、ふりあげる此の腕

そこに此の世界を破壊する憂鬱な力がこもつてゐるのだ

娘つ子はこんな腕でだき締められる

人形のやうな目のぱつちりしたあかんぼに

むくむくと膨くれた乳房が吸はせてみたくはないか
それも神の意志だ
これも神の意志だ
言へ

自分達こそ男と女の神様なんだと

人間に與へる詩

そこに太い根がある

これをわすれてゐるからいけないのだ

腕のやうな枝をひつ裂き

葉つばをふきちらし

頑丈な樹幹をへし曲げるやうな大風の時ですら

まつ暗な地べたの下で

ぐつと踏張つてゐる根があると思へば何でもないのだ

それでいいのだ

そこに此の壯麗がある

樹木をみる

大木をみる

このどつしりとしたところはどうぞ

わすれられてゐるものについて

君達はひつ提げてゐる

各自に槓杆よりも立派な腕を

石つころをも砕く拳を

これはまたどうしたものだ

それで人間をとり返えさうとはしないのか

全くそれを忘れてゐる

そして馬鹿だと罵られてゐる

鐵のやうな腕と拳と

金銭で賣買のできない武器とは此のことだ

それは他人には何の役にも立たない各自のもので

君達に最初さういふ唯一の尊い武器をくだすつたのは神様だが

それをまるで薪木にもならないものだと嘲つて棄てさせ

やうとした悪漢は誰だ

だが考えてみれば

馬鹿だと言はれる君達よりも

君達を馬鹿だといふ奴等の方がよつほど馬鹿なんだ

いまに君達がひつ提げながらも忘れてゐるその腕と拳とをおもひだす時

其時、一人が千人萬人になるんだ

其時彼奴等は地べたにへたばるんだ

まあいいさ

何もかも神様がごぞんじでいらつしやることだ

そうして其時、世界が息を吹返すんだ

寝てゐる人間について

みる

何といふ立派な骨格だ

そしてこの肉づきは

かうしてすつばだかで
ごろりとねてゐるところはまるで山だ
すやすやと呼吸するので
からだは山のうねりを打つ
ようくお寝み
ようくおやすみ
ゆふべの泥酔がすつかりさめて
ばつちりと鯨のやうな目があいたら
かんかん日の照るこの大地を
しつかり
しつかり
ふみしめて

またはたらくのだ
ようくおやすみ
おお寝てゐる人間のもつてゐる此の偉大
おおびくともしない此の偉大
それを見てもと
自らあたまが垂れる

子どもは泣く

子どもはさかんに泣く

よくなくものだ

これが自然の言葉であるのか
何でもかでも泣くのである

泣け泣け

たんとなけ

もつとなけ

なけなくなるまで泣け

そして泣くだけないてしまふと

からりと晴れた蒼天のやうに

もうにこにこしてゐる子ども

何といふ可愛らしさだ

それがいい

かうしてだんだん大きくなれ

かうしてだんだん大きくなつて

そしてこんどはあべこべに

泣く親達をなだめるのだ

ああ私には眞實に子どものやうに泣けなくなつた

ああ子どもはいい

泣けば泣くほどかはゆくなる



IV

或る朝

よるこびはまづ葱や菜つばの揺れるところからはじまつ
て
これから……

人間の午後

まだそこで

わめきうめいてゐるのか

グアキオリン

何といふ重苦しい日だ

黒黒と吐かれる煤烟

大きなけむだしの彼方に太陽はおちて行く

此の憂鬱のどん底で

うごめいてゐる生きものに幸あれ

祈禱の一ばんはじめの言葉
主よ、人間のくるしみはひまはりよりもうつくしい

雨の詩

ひろい街なかをとつとつと
なにもものかに追ひかけられてでもゐるやうに驅けてゆく
ひとりの男
それを見てひとびとはみんなわらつた
そんなことは目もくれないで

その男はもう遠くの街角を曲つて見えなくなつた
すると間もなく
大粒の雨がぼつぼつ落ちてきた
いましてがたわらつてゐたひとびとは空をみあげて
あわてふためき
或るものは店をかたづけ
或るものは馬を叱り
或るものは尻をまくつて逃げだした
みるみる雨は横ざまに
煙筒も屋根も道路もびつしよりとぬれてしまつた
そしてひとしきり
街がひつそりしづかになると

雨はからりとあがつて
さつぱりした青空にはめづらしい燕が飛んでゐた

荷車の詩

日向に一臺の荷車がある
だれもゐない
ひつそりとしてゐる
木には木の實がまつ青である
荷車はぐつたりとつかれてゐるのだ

そしてどんよりした低氣壓を感じてゐるのだ
路上には濃い紫の木木の影
その重苦しい影をなげだした荷車

歡樂の詩

ひまはりはぐるぐるめぐる
火のやうにぐるぐるめぐる
自分の目も一しふになつてぐるぐるめぐる
自分の目がぐるぐるめぐれば

いよいよはげしく
ひまはりはぐるぐるめぐる
ひまはりがぐるぐるめぐれば
自分の目はまつたく暈み
此の全世界がぐるぐるとめぐりはじめる
ああ！

海の詩

どんよりとした海の感情

砂山にひきあげられた船船
波間でひどく揺られてゐるのもある
はるか遠方の沖から
こちらをさしてむくむくともりあがり
押しよせてくる海の感情
何處どこからくるか
この憂鬱な波のうねりは
そこのしれないふかさをもつて
此の大きな力はよ
ああ海は生きてゐる！
夜晝よるひる絶えず
渚しづにくだける此の波波のすばらしさ

そこにすむ漁夫等を思へ

ザボンの詩

おそろしい嵐の日だ
けれど卓上はしづかである
ザボンが二つ
あひよりそふてゐるそのむつまじさ
何もかたらず
何もかたらないが

それでよいのだ
嵐がひどくなればなるほど
いよいよしづかになるザボン
たがひに光澤を放つザボン

此處で人間は大きくなるのだ

とつとつと脈うつ大地
その上で農夫はなにかかんがへる
此の脈搏をその鎌尖に感じてゐるか

雨あがり

しつとりとしめつた大地の感觸

あまりに大きな此の幸福

どつしりとからだも太れ

見ろ

なんといふ豊かさだ

此の青青とした穀物畑

このふつくりとした畝畝

このひろびろとしたところで人間は大きくなるのだ

おお脈うち脈うつ大地の健康

大槌で打つやうな美である

郊外にて

赭土の瘠せた山ぎはの畑地で

みすばらしい麦穂が風に揺られてゐた

わたしはすこし飢えてゐる

わたしは何かをもとめてゐる

麦穂の上をとほつてどこへ行くのか

そよ風よ

みどり濃く色づいた風よ

都會の空をみる

烟筒の林のしたの街街を

つばめはそのなかをとんでゐる

人人もそこに棲むのをよろこんでゐる

ここにゐてきこえる

あの空に反響する都會の騒擾

そこはまるで海のやうだ

風はそよそよと

麥穂に何をささやくのか

麥穂は首をふつてゐる

それがさみしい

波だてる麥畑の詩

わたしらを圍繞^{とらま}くひろびろとした此の麥畑から

この黄金色した畝畝の間から

私がかうして土だらけの手を君達のかたへとさし伸べる

君達は都會の大煙筒のしたで

終日じつと何をかんがへてゐるのだ

それが此の目にみえるやうだ

ああ大東京の銀座街

そこでもそよ風は華奢にひらひら翻つてゐることか

そのそよ風のもつてゆく生々しい穀物のにほひで
街の店店はみたまれたか

すこやかであれ
すこやかであれ

都會は君達のうへのしかかり

そして君達はくるしんでゐる

それは君達ばかりではない

それだからとてどうなるものか

しつかりしろ

ああ此の波だてる麥畑

わたしらをおもへ

わたしらはこの麥ばたけで

君達のうしろに立つてゐるのだ

君達の前額ひたいをふいてゐるそよ風は私等がここからおくつ

てゐるのだ

ああ此の豊饒ゆたかな麥畑に

ああ此處にあるひばりの巢

その巢に小さな卵があると

私はこの事を君達に——全世界につげなければならぬ

刈りさられる麥麥の詩

ああ何といふ美しさだ

此のうつくしきは生きてゐる！

みる

麥畠はすつかりいろづき

ところどころの馬鈴薯と

蠶豆と葱と菜つばと

大きな大きなみはてのつかない此のうつくしさ

一めん黄金いろに麥は熟れ

刈りとられるのをまつてゐるやうな此のしづかさ

あちらこちらではじまつた麥刈り

あちらこちらから冴えざえときこえる鎌の刃の音

水の迸るやうなその音のするどさ

わたしの心は遠いところで獻款をやめない

彼女は何をしてゐることか

わたしは彼女のことを思つてゐる

その上に此のひろびろとした畑地の美しさを堆積ねるの

だ

片つ端から刈りとられる麥麥

冴えざえと鋭くきこえる鎌の刃の音

麥もわたしとその音をきいてゐるのか

ゆたかに實のり
ぐつたりと重い穂首を垂れた麥

都會にての詩

都會はまるで海のやうだ
大波のよせてはかへず
此の海のやうな煤煙のそこで渦く
千萬の人間の聲聲
よせてはかへず聲の大波

大きな一つの聲となり
うねりくねり
のたうちながらも人間であれ
ああ海のやうな都會よ
その街街家家の軒かげにて
飢えながら雀でさへ生き
そこで卵をあたため孵えしてゐるのだ
強くあれ
強くあれ
人間であることを信じろ
それを確く

大 鉞

てうてうときをうてば
まさかりはきのみきをかむ
ふりあげるおほまさかりのおもみ
うでにつたはるこのおもみ
きはふるえる
やまふかくねをはるぶなのたいぼくをめぐけて
うちおろすおほまさかり
にんげんのちからのこもつたまさかり

ああこのきれあぢ

このきのにほひのなまなましさ
ひつそりとみみをすましたやうなやまおおく
やまやまにはんきやうして
てうてうときのみきにくひいるまさかり
おほまさかりはたましひをもつ

一本のゴールデン・バット

一本の煙草はわたしをなぐさめる

一本のゴールデン・パットはわたしを都會の街路につれだす
80

煙草は指のさきから

ほそぼそと一すぢ青空色のけむりを立てる

それがわたしを幸福にする

そしてわたしをうれしく

光澤やかな日光にあててくれる

けふもけふとて火をつけた一本のゴールデン・パットは

騒がしいいろいろのことから遠のいて

そのいろいろのことのなかにながら

それをはるかになだめさせる

ああ此の足の軽さよ

收穫の時

黄金色に熟れた麥

黄金色のビールにでも酔ふやうに

そのゆたかな匂ひに酔へ

若い農夫よ

此處はひろびろとした畠の中だ

娘つ子にでもするやうに

かまふものか

穀物の束をしつかり抱きしめてかつぎだせ



V

下中、

山のかなたに夕立雲はかくれてゐる
このまに
このまに
いま
そして君達の收穫のよるこびを知れ
刈り干された穀物を愛せよ

キリストに與へる詩

キリストよ

こんなことはあえてゆづらしくもないのだが
けふも年若な婦人がわたしのところに来た
そしてどうしたら

聖書の中にかいてあるあの罪深い女のやうに
泥まみれなおん足をなみだで洗つて

黒い房房したこの髪の毛で

それを拭いてあげるやうなことができるかとたづねるの

た

わたしはちよつとこまつたが
斯う言つた

一人がくるしめばそれでいいのだ
それでみんな救はれるんだと

婦人はわたしの此の言葉によるこばされていそいと歸
つた

婦人は大きなお腹はらをしてゐた
それで獨り身だといつてゐた

キリストよ
それでよかつたか

何だかおそろしいやうな氣がしてならない

或る淫賣婦におくる詩

女よ

おんみは此の世のはてに立つてゐる

おんみの道はつきてゐる

おんみはそれをしてゐる

いまこそおんみはその美しかつた肉體を大地にかへす時
だ

静かにその目をとちて一切を忘れねばならぬ

おんみはいま何を考へてゐるか

おんみの無智の尊とさよ

おんみのくるしみ

それが世界の苦みであると知れ

ああそのくるしみによつて人間は赦される

おんみは人間を救つた

おんみもそれですくはれた

どんなことでもおんみをおもへばなんでもなくなる

おんみが夜夜うす暗い街角に餓えつかれて小猫のやうに

たたずんでゐた時

それをみて石を投げつけたものは誰か

あの野獸のやうな人達をなぐさむるために

年頃のその芳醇な肉體を

ああ何の憎しみもなく人人のするがままにまかせた

齒を喰ひしばつた刹那の淫樂

此の忍耐は立派である

何といふきよらかな靈魂をおんみはもつのか

おんみは彼等の罪によつて汚れない

彼等を憐め

その罪によつておんみを苦め

その罪によつておんみを滅ぼす

彼等はそれとも知らないのだ

彼等はおのが手を洗ふことすら知らないのだ

泥濘の中にて彼等のためにやさしくひらいた花のおんみ

どんなことでもつぶさに見たおんみ

うつくしいことみにくいこと

おんみはすべてをしりつくした

おんみの仕事はもう何一つ残つてゐない

晴晴とした心をおもち

自由であれ

寛大であれ

ひとしれずながしながしたなみだによつて

みよ神かみ神かみしいまでに澄んだその瞳

聖母摩利亞のやうな崇高せうたうさ

おんみは光りかがやいてゐるやうだ

おんみの前では自分の頭はおのづから垂れる

ああ地獄の月よ

おんみの行爲は此の世をきよめた

おんみは人間の重荷をひとりで脊負ひ

人人のかほりをつとめた

それだのに捨てられたのだ

ああ正しい

蒼ざめた地獄の月

病める猫よ

おんみはこれから何處へ行かうとするのか

おんみの道はつきてゐる

おんみの肉體からだは腐りはじめた

大地よ

自分はなんにも言はない

此の接吻を眞實のためにうけてくれ
ああ何でもしつてゐる大地

そして女よ

曾て彼等の讚美のまつただ中に立ちながら

ひとときのやすらかさもなかつた

おんみを蛆蟲はいま待つてゐるのだ

あらゆるものに永遠の生をあたへ

あらゆるものをきよむる大地

此の大地を信せよ

人間の罪の犠牲としておんみは死んでくださるか

自分はおんみを拜んでゐる

彼等はなんにもしらないのだ

わかりましたか

そして吾等の骨肉よ

いまどここちらを向いて

おんみのあとにのこる世界をよくみておくれ

溺死者の妻におくる詩

おんみのかなしみは大きい

女よ

おんみは靈魂を奪ひ去られた人間

おんみの「生」は新しく今日からはじまる

その行末は海のやうだ

そしてさみしい影を引くおんみ

けふもけふとて人人はそれを見たと言ふ

何んにも知らずにすやすやとねむつたあかんぼ

そのあかんぼを脊負つて泣きながら

渚をあちらこちらと彷徨つてゐるおんみの残すその足あ

と

その足あとを洗ひけす波波

女よ

おんみは此の怖ろしい海をにくむか

にくんではならない

おんみは此のひろびろとした海を恨むか

うらんではならない

海でないならと眩くな

ああそれが海である悲しさに於て

静におもへ

海はただ轟轟と吼えてゐるばかりだ

波は岸を噛みただ荒狂つてゐるばかりだ

海に悪意がどこにある

それは自然だ

けれど溺れる人間の小ささよ

人間の無力を知れ

溺れたものがどうなるか

いたづらになげきかなしむことをやめ
それよりは脊負ふその子を立派に育てることだ
強く強く

海より強く

波より強く

その手の上に眠る海

その手の下に息を殺した暴風と波と

此の壯大な幻想を

あかんぼの未来に描け

それをたのしみに生きろ

その子のちからが此の大海を統御する時

おんみはもはや悪まず恨まず

此の海をながめ

此の海の無私をみとめて

はじめて人間を知るであらう

人間を

そして此の海をかき抱くばかりに愛するであらう

而もおんみはそれまでに

いくたび海に悲しくも語らねばならぬか

せめてその屍體なりと返してよと

ああ若くして頼るべなき寡婦よ

大きな腕の詩

どこにか大きな腕がある

自分はそれを感じる

自分はその何が何處にあるか知らない

それに就ては何も知らない

而もこれは何といふ力強さか

その腕をおもへ

その腕をおもへば

— どんな時でも何處からともなく此のみうち^{みうち}に湧いてくる

大きな力

ぐたぐたになつてゐた體軀^{からだ}もどつしりと

だがその腕をみやうとはするな

見やうとすれば忽ちに力は消えてなくなるのだ

盲者^{めくら}のやうに信じてあれ

あゝ生きのくるしみ

その激しさにひとしほ強くその腕を自分は感ずる

幸薄^{きまじ}しとて眩くな

どこかに大きな腕があるのだ

人間よ

此のみえない腕をまくらにやすらかに

抱かれて眠れ

XO
先驅者の詩

此の道をゆけ

此のおそろしい嵐の道を

はしれ

大きな力をふかぶかと

彼方かなたに感じ

彼方をめがけ

わき目もふらず

ふりかへらず

邪魔するものは家でも木でもけちらして

あらしのやうに

そのあとのことなど問ふな

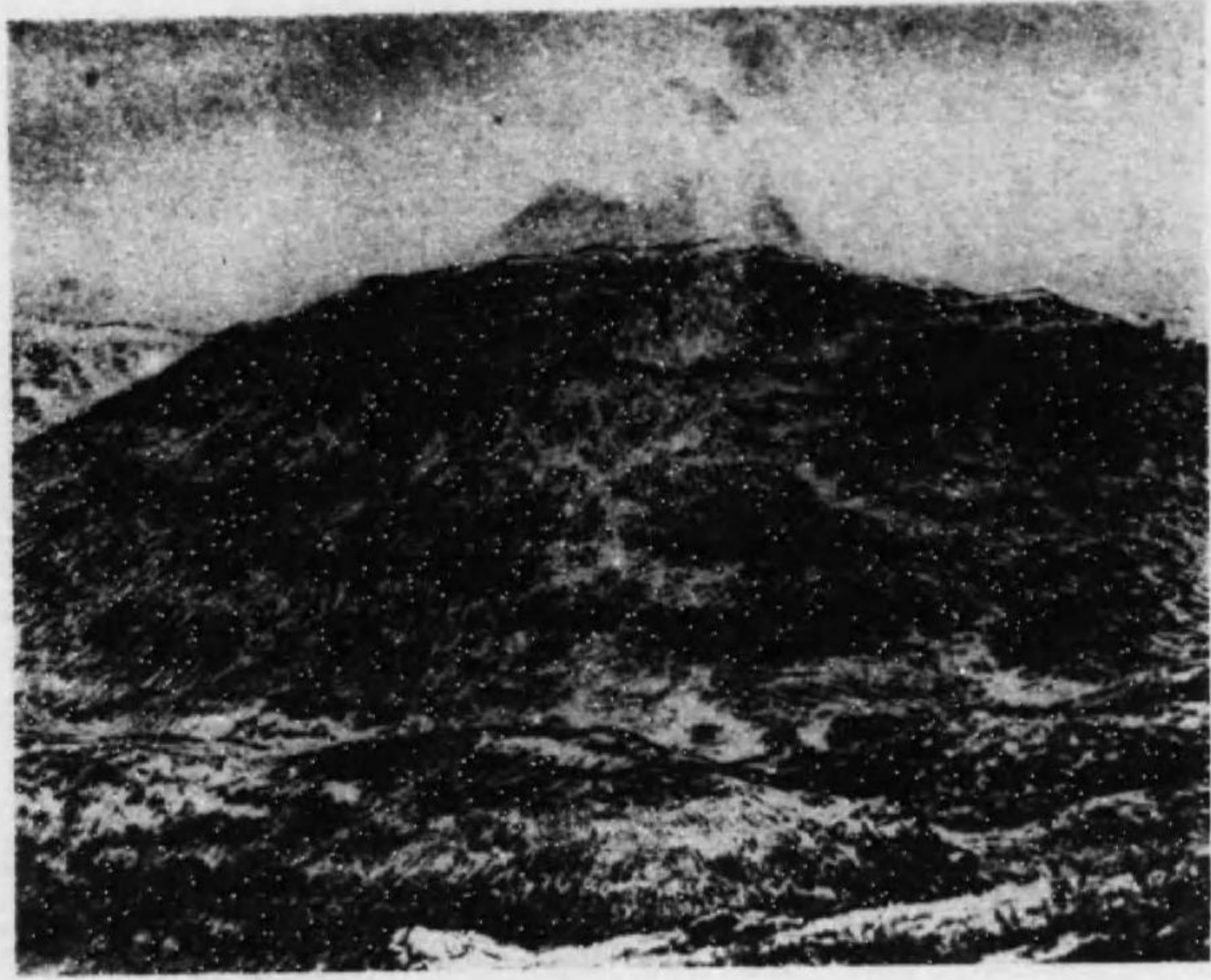
勇敢であれ

それでいい

故郷にかへつた時

これではない

こんなものではない



VI

自分が子どもでみた世界は
山山だつてこんなにもすばらしく低くはなかつた
何もかもうつくしかつた

秋
ぐ
ち

TO K. TOYAMA.

さみしい妻子をひきつれて
遙遙とともは此地を去る
渡り鳥よりいちはやく
そして何處へ行かうとするのか
そのあしもとから曳きたよりない陰影
そのかげを風に揺らすな
秋ぐちのうみぎしに
錆はあかく錆びてゐる

みあげるやうな崖の上には桔梗や山百合がさいてゐる
紺青色の天そらよりわたしの手は冷い

102

友よ

おん身のまづしさは酷すぎる

而もおん身の落窪んだその目のおくに眞實は汚れない
生いもちを知れ

友よ

人間は此の大きな自然のなかで銘銘に苦んでゐるのだ
しづかに行け

此の世界のはじめもこんなであつたか

うすむらさきのもやはれゆく

海をみろ

此のすきとほつた海の感覺

おお此の黎明

この世界のはじめもこんなであつたか

さざなみのうちよせるなぎさから

ひろびろとした海にむかつて

一人のとしよつた漁夫がその掌てをあはせてゐる

103

渚につけた千鳥のあしあともはつきりと
けさ海は静穏かである

ひごりごご

一日中のはげしい労働によつて

ぐつたりとつかれた體からだ

今朝けさみると

むくむくと肥え太り

それがなみなみと力を漲らしてゐる

そしてあふれるばかりになつてゐる
それは大きな水槽が綺麗な水を一ぱいたたえてゐるやま
だ

たらたらと水槽には筧の水がしたたるのだが

おお此の肉體の力はよ

それは眠つてゐるまに何處どこから來たか

力はあふれる水のやうなものだ

肉體から充ちあふれさうな此の力

それをまたけふもけふとて彼方かなたで頻りに待つてゐる

あの丘つづきの穀物畠

あの色づいて波立てる麥の畠をおもへ

此の新しい日のひかり

新しくあれ
ゆたかな力のよろこびに生きる

新聞紙の詩

けふ此頃の新聞紙をみる
此の血みどろの活字をみる
目をみひらいて讀め
これが世界の現象である
これが今では人間の日日の生活となつたのだ

これが人類の生活であるか
これが人間の仕事であるか
ああ惨酷に築くはれた人間種族
何といふ怖しい時代であらう
牙を鳴らして噛合ふ
此の呪はれた人間をみる
全世界を手にとるやうにみせる一枚の新聞紙
その隅から隅まで目をとほせ
活字の下をほじくつてみる
その何處かに赭土の瘠せた穀物畠はないか
注意せよ
そしてその畝畝の間にしのびかくれて

世界のことなどは何んにも知らず

よしんばこれが人類の終焉をはりであればとて

貧しい農夫はわれと妻子のくふ穀物を作らねばならない

そこに残つた原始の時代

そこから再び世界は息をふきかへすのだ

おお黄金色こがねいろした穀物畠の幻想

此の黄金色した幻想に實のぞみのる希望よ

汽車の詩

信號機シグナルがかたりと下りた

そこへ重重的い地響をたてて

大旋風のやうに堂々と突進してきた汽車

みる

並行し交叉してゐる幾條のれいゝるのなかへ

その一本の線をえらんで

飛びこんできた此の的確さ

そしてびたりとぶらつとほいむで正しくとまつた

此立派さを何といはうか

此の勇敢は壓迫する

けれど道は遠い

瀛^{ヒン}罐^{カン}をば水と石炭とでたつぶり満たせ

而して語れ

子どもらの歡呼をうけてきたことを

それから女の首と手足をばらばらにしたことを

木も家もひつくりかへして見せたことを

子どもらの愛するものよ

此の力強さを自分も愛する

都會の詩

煤烟はうつくしい

その煤烟で一ぱいになつた世界だ

その中にある此の都會

働く者のかほをみる

その手足をみる

何といふ崇^け高^かいことだ

ああ煤烟

その中でうめく労働者の群

ふしぎなことあればあるものだ
これが新鮮で
而も立派にみえるのだ
なにもかも惨酷のすることだ
ああたまらない
ひきつけられる

都會の詩

けむりの渦巻く

薄暮の都會

ぼつと花のやうに點じ
蔓のやうな燈線のいたるところで
黄金色に匂ふ燭光のうつくしさよ
黄金色に匂ふ千萬の燭光
みろ
都會はまるで晝のやうだ
だいあもんどがなんだ
るびいがなんだ

此の壯麗な都會の街街家家

ここに棲む人間なればこそどんな苦みをも耐へるのだ
ここにすむ人間の幸福

ああ何もいらぬ
此の壯麗に匹敵するものは何か
此の幸福の上にあつて
都會は生きてゐる
よるのふけるにしたがつて
よるがふければふけるほど
だんだん都會は美しく光りかがやき
ここで疲れた人間が神神のやうに嚴かな眼^ま險^{ぶた}を靜にとぢ
るのだ
此のうつくしさは生きてゐる

握 手

どうしたといふのだ
そのみすばらしいしほれやうは
そのげつそりと瘦せたところはまるで根のない草のやう
だ

おい兄弟

どうしたといふのだ

何はともあれ握手をもつてはじめることだ
さあその手をだしたまへ

しつかりと自分が握つてやる

大麥を刈りとつた畠に

これはいま秋そばを播きつけてきた手だ

どんなことでもしつてゐる手だ

どんなことにも耐へてきた手だ

土臭いとて顔を覺めるな

此の手は君に確信を與へる

ぐつとつきだせ

もじもじするのは耻づべき行爲だ

君もその手に力をこめて

そして自分の痛いといふほど

握りかへしてくれ

それでよろしい
強く正しく直立て！

太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ

一日の終りのその東の間をいろどつてゆつたりと

太陽はいま蜀黍畑にはいつたところだ

大きなうねりを打つて

いくへにもかさなりあつた丘の畑と畑とのかなたに

赤赤しい夕焼け空



VII

枯草を山のやうに積んだ荷馬車がかたことと
その下をいくつもつづいてとほつた
何といふやすらかなさだ

此の大きいやすらかな世界に生きながら人間は苦んで
る

そして銘々にくるしんでゐる

それがうつくしいのだ

此のうつくしさだ

どこか深いところで啼いてゐるこぼろぎ

自分を遠いとほいむかしの方へひつばつてゆくその聲

けれど過ぎさつた日がどうなるものか

何もかも明日あしたのことだ

自分はさみしく考えてゐる

ひとびとを喜ばすのは善いことである

自分をよろこばすのは更に善いことである

ひとびとをよろこばすことは

或は出来るかも知れぬ

自分をよろこばすことは大切であるが容易でない

物といふあらゆる物の正しさ

みなその位置を正しく占めてゐる秋の一日

すつきりと冴えた此の手よ

瘦せほそつた指指よ

こんなことを自分はひとり考へてゐる
なんといふさみしい自分の陰影であらう

蝗

くるしみはうつくしい

人間の此の生きのくるしみ

これは人間ばかりでない

これが自然の深い大きな意志であるのか

深藍色にすつきりとした空

秋の日のうすらさみしさ

あちらこちらの畦畦にみすばらしい彼等をみよ

女達と子ども等と

その手をのがれて逃げまどふ蝗蟲を

ひつそりと貧しい村村

ながながしい鶏の聲

田の面はひろびろと風ぎ

蝗蟲がびよんびよん飛んでゐる

それをつかまへやうとしてあらそひ

それを追つ駆けまはしてゐる彼等

しきりにびよんびよんと
弱弱しい晝過ぎの光線を亂してとんでゐる
そしてまんまと捕へられる蝗蟲よ

愛の力

穀物に重い穂首をたれさせる愛のちからは大きい
赤赤しい秋の日
ひろびろとした穀物畠
ひろびろと

としよつた農夫はそれに見惚れ
煙管の吸ひ殻をはたきながら
いたづらな雀や鴉に何をかたつてゐるのか
ゆたかに實のつた穀物は金の穂首をひくくたれて
だまつてそれを聞いてゐる
穀物に重い穂首をたれさせる愛のちからは大きい
黄銅のやうなその農夫のあたまの上に
蜻蛉が一びき光つてゐる
何といふ静かさであらう

人間の神

手に大鍬をつつばつて
ひろびろとした穀物畠の上をしみじみ眺めてゐる
としよつた農夫の顔よ
その顔の神神しさよ
農夫は世界のたましひである
農夫は人間の神である
黎明よけからのほげしい労働によつて
崖壁のやうな胸をながれる脂汗

その胸にたたへた人間の愛によつて
穀物は重い穂首をひくく垂れた
みよ一日はまさに終らんとしてゐる
赤赤しい夕焼け空
大鍬の泥土どろをかきおとすのらわすれて
農夫はひろびろとした穀物畠を飽かずながめてゐる
その彼方かなたにあかあかと
太陽は今やすらかにはいつて行くところだ

秋のよろこびの詩

青竹が納屋なぐらの天井の梁にしばりつけられると
大きな摺臼は力強い手によつてひとりでに廻りはじめる
ごろごろと

その音はまるで海のやうだ

金の穀物は亂暴にもその摺臼に投げこまれて

そこでなかのいい若衆わかしゅと娘つ子のひそひそばなしを聞か
せられてゐる

ごろごろと

その音はまるで海のやうだ
ごろごろごろごろ
何といふいい音だらう
あちらでもこちらでもこんな音がするやうになると
お月様はまんまるくなるんだ
そしてもうひもじがるものもなくなつた
ああ收穫のよろこびを
ごろごろごろごろ
世界のはてからはてまでつたへて
ごろごろごろごろ

草の葉つばの詩

晩秋の黄金色のひかりを浴びて
野獸の脊の毛のやうに荒荒しく簇生してゐる草の葉つば
一まいの草の葉つばですら
人間などのもたない美しさをもつ
その草の葉つばの上を
素足ではしつて行つたものがある
素足でその上はをしつて行つたものに
そよ風は何をささやいたか

こんなことにもおどろくほど
ああ人間の悩みは大きい
素足でその上をはしつて行つたものがあると
草の葉つばが騒いでゐる

或る風景

みろ
大暴風の蹴ちらした世界を
此のさつぱりした惨酷らしさを

骸骨のやうになつた木のてつべんにとまつて
きりきり百舌鳥がさけんでゐる

けろりとした小春日和
けろりとはれた此の蒼空よ

此のひろびろとした蒼空をあふいで耻ぢろ
大暴風が汝等のあたまの上を過ぐる時

汝等は何をしてゐた
その大暴風が汝等に呼びさまさうとしたのは何か

汝等はしらない
汝等の中にふかく睡つてゐるものを

そして汝等はおそれおののき両手で耳をおさへてゐた
なんといふみぐるしさだ

人間であることをわすれてあつたか
人間であるからに恥ぢよと
けろりとはれ

あたらしく痛痛しいほどさつぱりとした蒼空
その下で汝等もうおらしも何も打ちわすれて
ごろごろと地上に落ちて轉つてゐる果實きのみ
泥だらけの青い果實をひろつてゐる

雪ふり蟲

いちはやく
こどもはみつけた
とんでゐる雪ふり蟲を
而も私はまだ
一つのことを考えてゐる

冬 近 く

お前の目にふかい
それはまるで淵のやうだ
冬近く
その目の中にぼつちり……
ぼつちりと點じた一つの灯を思へ
此の眞實に生きよ
いまは薄暮である
此のさびしさを愛せよ

蟋 蟀

記憶せよ

あの夜のことを

あの暴風雨を

あの暴風雨にも鳴きやめず

ほそぼそと力強くも鳴いてゐた

蟋蟀は聲をあはせて

はりがねのやうに鳴いてゐた

自分はそれを聞いてゐた

或る日の詩

草の葉つばがゆれてゐる

その葉がかすかになびいてゐる

あらしが何處かを

いまとほる

いまとほるのか

ひつそりとした此のしづかさ

蜻蛉、蜻蛉

此の指さきにきてとまれ

或る日の詩

ひとりには寂しい

群衆の中はさらに寂しい

自分ばかりか

否

お寂しい人間よ

かくも生いぢはさびしいものか

此の眞實に生きよと

木の葉はちる

はらはらとちる

秋の黄昏

みよ、いま世界は黄金色に夕焼けして

此の一日を終るところだ

はらはらとちる木の葉つば

記憶の樹木

樹木がすんなりと二本三本
どこでみたのか

その記憶が私を揺すつてゐる……
入日に浸つて黄色くなつた

最後の葉つば

その葉の落ちてくるのをそれとなく待つてゐた

それが自分達の上でひるがへり

冬の日には寂しく暗くなりかけた

風の日はいまも其の木木

骨のやうになつた梢のしやが嘎れ聲

山

と或るカフェに飛びこんで

何はさて熱い珈琲を

一ぱい大急ぎ

女が銀のフォークをならべてゐる間も待ちかねて

餓えてゐた私は

指尖をソースに浸し

彼奴の肌のやうな寒水石の食卓に

雪のふる山を描いた

その山がわすれられない

道

道は自分の前にはない

それは自分のあしあとだ

これが世界の道だ

これが人間の道だ

この道を蜻蛉せみもとほると言へ

初冬の詩

そろそろ都會がうつくしくなる

人間の目が険しくなる

初冬

お前の手は熱く

やがて火のやうになるのだ

路上所見

大道なかをあばれてくる風
それに向つて張上げる子ども
の聲
風はその聲をうばひさつたよ
けれど子どもはもうその風の鋭い爪もなにもわすれて
むかふの方を歩行いてゐる

友におくる

友よ
その足の腫物をいたはれ
その金の腫物を
うづきうづくいたみ
ながれる愛の膿汁

悪い風

街角で私は
悪い風に遭つた
どこかで見たやうな風だ
そうだ
いつか田圃で
子どもの紙鳶をうばつて逃げた
あの風の奴めだ

雪の詩

ちらちらと落ちてきた
雪の群集
どんよりとした空の彼方から
これが冬の飾りであるのか
此の世界への贈り物であるのか
純銀の街と村村と
此の凍えてゐる人人の上にふるか
雪は人間を意志的にする



VIII

雪は力を堆積する

そして人間之神神と一しよにする

祝福せよ

子ども等はうれしさにけものやうだ

ちらちらと落ちてくる雪

雪の残忍な靈魂

このうつくしさを頬張り食り

くるへ

雪もおどれ

雪のやうな子ども等

世界の黎明をみる者におくる詩

鶏の聲にめざめた君達だ
からすや雀より早くおきいで
そして畑へ飛びだした君達だ
朝露にびつしよりとぬれた君達だ
まだ太陽も上らないのに
君達の額にはやくも汗ばんだ
君達はひろびろとした畑の上で
世界の黎明をみた

それをみるのは君達ばかりだ
此の世のはてからのぼつてくるその太陽を
どんなに君達はおどろかしたとか
君達はしるまい
君達はしるまい
此の若き農夫を思へ！

自分は此の黎明を感じてゐる

自分は感じてゐる

此の氷のやうな闇の底にて目もさえざえと
ふゆの黎明を
遠近でよびかはす鶏の聲聲
人間の新しい日をよびいだすその聲を
ぐらすのやうに冴えかへる夜氣
枯れ残つた草の葉つばの上に痛痛しい雪のやうな大霜
なにもかもはつきりとした世界の目ざめ
此の永遠の黎明を
自分はずよく感じてゐる
それをどんなにのぞんでゐるか
而も夜はながい
おもへ

朝日にかがやく冬の畑を
大地の中で肥えふとる葱や大根を
それから人類のことを

偉大なもの

偉大なものは砲弾ではない
櫛の木のやうな腕である
それはまた金貨でもない
鋼鐵の齒をもつ胃ぶくろである

その上に
此の意志だ

強者の詩

人間の此上もなきかなしみは
此のくるしみの世界に生みいだされたことだと云ふか
否！
これこそ人間のよろこびではないか
此のうつくしさが解らないのか

何といふうつくしきであらう

此のくるしみの世界は

此のくるしみに生くることは
みよ

ひろびろとした此の秋の田畠を

重い穂首をたれた穀物

いさましいその刈り手

その穀束をはこび行く馬

ゆたかな天日の光をあびつつ

其處にも此處にも

落穂をひらふ貧しい農婦等

からすや雀も一しよであるのか

此のむつまじきを知れ

此のうつくしきはどうか

此の大きなうつくしきはどうか

此のうつくしきを知るものは強い

此のくるしみの世界にのみ

人間の生きのよるこびはある

人間の生きのよるこびよ

強きものにのみ此の世界はうつくしいのだ

かくして峻厳な一日ははじまり

かくして人間の一日は終る

強くあれ

病める者へ贈物ごしての詩

林檎より美しいもの

かすてらより柔いもの

此の愛をそなたにおくるのだ

此の愛を

雪のやうな此の愛

落葉のやうにはらはらと

そなたの上に翻へる

そなたはそれをどうみるか

風の中なる私の愛を……

何といふ冷い手だ

何といふさみしい目だ

おお病める者

そなたのためには純白な雪

そして火のやうな私だ

この愛の中で穀物の種子のやうな強き生をとりかへせ

光りを感じ

しづかに生き